

えたり。

〔萬葉集雜歌〕寄木

向峯爾立有桃樹成哉等人曾耳言爲汝情勤、

〔枕草子十二〕わざとだちてことねりわらはのつぎくしきを身ちかくよびよせて、うちさめきいぬるのちも久しくながめて、○下

〔藻鹽草人事〕詞○中

しりう言○中

〔倭訓栞前編十一〕しりうごと

後言をよめり源氏にしりうごちとも見えた、今いふかげ言也。

〔北邊隨筆〕あ。と。う。が。た。り。

しりうごと

後撰集にあとうがたりといふ事あり、○中 枕草紙にもしりうごと、あり此ふたつの詞ともに俗に陰口といふ心なり、あともしりも同じ心なればなり、いたくへだりたる世にはあらねど、あとうがたりはふるくしりうごとは後にや源氏物語上 菜にもしりうごちとみえたり、

〔倭訓栞前編二〕あとうがたり

後撰集の詞書に見えた、定家卿の僻案に拾遺集になぞくが

たりと書りといへり、其歌は素盞鳴尊の故事をふまへてよめれば、げにとおもはる、あとなしごと、同義なるべし、

〔空穂物語 藤原の君〕さて物がたらひもうち聞えんかしれるどちこそ、あとがたりもすなれ、さよこの給へり、

〔後撰和歌集十八〕人のむこのいままうでこんといひて、まかりにけるが、文をこする人ありときて、ひさしうまうでござりければ、あとがたりの心をとりて、かくなん申けるといひつかはしける、